ギターがポピュラー音楽の花形になった理由

――未完成を可能性に変えた偉人たち

音楽評論家　萩原健太

チャーリー・クリスチャン
『ザ・ジニアス・オブ・ザ・エレクトリック・ギター』
Sony Music Labels Inc.
1931～41年のベニー・グッドマンとの活動を集めた貴重なアルバム。

広く一般に認知されている楽器のうち、とびきり手軽に持ち運べ、しかもソロ演奏もコード演奏も可能なギター。その特色だけでも、ギターはポップ音楽の主役たり得ているわけだが、加えてギターにはさらに魅力的な特質がある。それは、きわめて〝未完成〟であるということ。

ギターほど未完成な代物はない。確かに弦が張られたネック上はフレットで仕切られており、とりあえずきちんとした音階は出せるものの、弦一本一本のチューニングを少しでもいじればすべてがファジー。ピアノのように絶対音律にしばられてるわけでもない。弦の張りも他の弦楽器、たとえばヴァイオリンやマンドリンほど強くないから、押さえる手に少し力を入れれば弦を絞り上げ音程を曖昧に変えることも可能。

隙だらけだ。永遠の開発途上楽器。特にエレキ・ギターは隙まみれ。この〝隙〟につけ込むように、古今東西の名ギタリストたちが画期的な奏法を次々編み出しながらギターを花形楽器へと育て上げていった。

最初の偉人は一九三九年、ベニー・グッドマン・セクステットの一員として名を上げたチャーリー・クリスチャンか。もともと三〇年代初頭、十代だったころからクリスチャンは地元テキサスでアコースティック・ギターを抱えて音楽仲間たちとジャム・セッションを楽しんでいた。が、サックスやピアノに比べて生音が小さいアコギだけに、どうしても役割はコード・カッティングによる伴奏が中心。そんなギターの弱点を克服するため、三〇年代半ば、クリスチャンはギターのボディにピックアップ・マイクを装着。大音量の確保に成功した。これで管楽器やピアノに遠慮することなくソロもとれる。こうして、当時大人気だったグッドマンのバンドに加入したクリスチャンは、ビバップ・ジャズの黎明期、ギターという楽器が担う役割を大きく飛躍させていった。

ギター本体のみならず、エフェクターの開発面でも、レコーディング技術の面でも、大きな刺激を与えたレス・ポールも三〇年代に自分なりのエレキ・ギターを開発。四〇年代にはマルチ・トラック・レコーディングの方法論を編み出した。そうした技術面での発明も駆使しながら、五〇年代、当時の妻であるメアリー・フォードとのデュオで三十曲の全米ヒットを放った凄腕ギタリストだ。デュオで出した『ハウ・ハイ・ザ・ムーン』などで聞かれる、アタックの強い、シンコペーションを効かせたフレージングは今聞いてもなお刺激的。ブルージーなベンド（＊1）を伴ったダブルストップ（＊2）も強力。ジャズもカントリーも分け隔てなく取り込んだレス・ポールのイマジネイティヴなプレイがなければ、たとえば後のヤードバーズの『ジェフ・ベック』（リード・ギターはジェフ・ベック）も、ベンチャーズの『キャラヴァン』（リードはノーキー・エドワーズ）もあり得なかった。

ジェフ・ベック
『ザ・ベスト・オブ・ジェフ・ベック
～エピック・イヤーズ1971-2003』
Sony Music Labels Inc.
選りすぐりの名曲・名演を網羅した、集大成とも呼べる日本独自企画のベスト盤。

スコッティ・ムーア
『ザ・ギター・ザット・チェンジド・ザ・ワールド』
オールデイズ レコード
初期エルヴィス・サウンドを支えた名ギタリスト、1964年ソロ作の復刻盤。

ロックンロールの王者、エルヴィス・プレスリーの初期を支えたスコッティ・ムーアの存在も見逃せない。タル・ファーロウやバーニー・ケッセルらジャズ・ギタリストに影響された単音フレージングと、マール・トラヴィスやチェット・アトキンスに触発されたカントリー系のギャロッピング奏法（＊3）とが混在するムーアのギター・ソロに影響された後輩たちはジョージ・ハリスン、キース・リチャーズ、ジミー・ペイジ、ジェフ・ベックらそれこそ無数だ。白人だったムーアに対し、黒人であるチャック・ベリーの影響力も見逃せない。あの有名なイントロを編み出した功績だけで、チャック・ベリーはロックンロール史上もっとも重要な人物として記憶されるべきだ。

六〇年代に入るとジェイムス・バートンが登場。彼がリッキー・ネルソンの『ハロー・メリー・ルー』などで披露したスティール・ギターを思わせる乾いたカントリー・ロック・ソロも素晴らしい。これは従来のレギュラー・ゲージ弦よりも細く、ベンドしやすいライト・ゲージ弦が生まれたことによって可能になったソロなのだが、このライト・ゲージ誕生にもバートンは一役買っている。当時スタンダードだったレギュラー・ゲージのような硬い弦でベンド

＊1　弦を押し上げて（下げて）音程を変える奏法。
＊2　2つの音を同時に鳴らす奏法。
＊3　親指で低音弦を弾いてベースラインやリズムを刻みながら、人差し指・中指・薬指などで高音弦を弾いてコードやメロディを演奏する奏法。

ヤマハギター 60年の軌跡 1966-2026

各時代を代表する製品を軸に、ヤマハギター60年の歴史を概観する。

「世界一のギターを作る」

ヤマハがギターの製造を開始したのは、終戦翌年の一九四六年頃とされる。当時はナイロン弦のクラシックギターが主流の時代であり、終戦直後に流行した明るい雰囲気の歌謡曲などで、そのあたたかな音色が奏でられていた。一九五五年頃、ヤマハはクラシックギターのボディにスティール弦を張ることができる「ダイナミックギター」を開発し、生産している。スティール弦のアコースティックギターにおいては、マーティンやギブソンといった米国ブランドが日本に台頭し、国内で製造されるギターはそれら舶来モデルのコピーが中心となっていった。

一九六五年頃、ヤマハのギターづくりに転機が訪れる。当時の社長であった川上源一が「世界一のギターを作る」という目標を掲げたのである。これを受け、翌六六年に「ギター研究課」が発足する。その使命は、高級手工ギターおよびスティール弦ギターの新分野への進出であった。高級手工ギターの製造は、クラシックギターの本場スペインが一世紀以上の歴史と伝統を誇るのに対し、日本にはそのノウハウがほとんどなく、白紙に近い状態だった。まさに手探りのスタートであったが、研究員たちはヤマハが培ってきたピアノに関する知見や文献を集め、木工や塗装のベテラン社員の経験を頼りに研究開発を推し進めた。

こうしたなか、一九六六年に〝現代ギターの祖〟と呼ばれる十九世紀のギター製作家アントニオ・デ・トーレスの流れを汲む、スペインの名工エドアルド・フェレールを浜松の本社に招き、技術指導を受ける機会を得た。その内容は、見るからに原始的な時間と根気を必要とする作業であった。研究員たちは、本当に優れた楽器を作るには、職人による熟練の技と、手間を惜しまない姿勢が何よりも大切であることを痛感した。ここで学んだスペイン式の知識と技術が、それ以降ヤマハの高級ギターづくりのベースとなる。そして一九六七年、クラシックギター「GCシリーズ」が誕生する。フェレールの薫陶を直接受けた研究員が丹念に作り上げたモデルで、国産品にはない明るい音色が特長の、スペインの流儀が息づくギターであった。

フェレールによる本格指導は、ひとりの若手研究員の挑戦意欲に火をつけた。彼はスペインでの二年半にわたる武者修行を敢行し、そこで体得した本場の熱きクラフトマンシップをヤマハに持ち帰り、それをギター開発の現場に根づかせていった。

クラシックギター「GCシリーズ」(1967年)

ギターの巻線工程(1968年／ヤマハ和田工場)

舶来ギター神話を打ち破れ

スティール弦ギターの新分野進出については、一九六五年頃の日本で圧倒的人気を誇っていたマーティンとギブソンという二大舶来ブランドに対抗するべく、日本人の体格に合わせたギターづくりの研究を重ねた。そしてボディを薄く、スケールを短く、ネックシェイプを細くし、薄すで損われる低音域をカバーするためにボディ幅を広くしたフォークギター「FG-180」を一九六六年に発表した。記念すべきヤマハ初の国産フォークギターであり、ヤマハギターの歴史はこれを起点に大きな一歩を踏み出した。後に〝赤ラベル〟と呼ばれた赤いインナーラベルがトレードマークの本器は、海外製品の模倣ではなく、オリジナルにこだわり抜いたことが特長で、現在まで続くヤマハアコースティックギターの原点といえる製品で同年初エレキベース「SB-2」も発表している。

ヤマハ初の国産フォークギター「FG-180」(1966年)

アコースティックギター「Lシリーズ」のカスタムモデル「L-52」(1975年)

一九七一年にはヤマハの楽器技術部門に「LM(ライトミュージック)設計課」が発足し、よりパワフルな音を求めるプレイヤーのニーズに応える製品開発に力を注いだ。そして一九七四年に、現在も続くエレキギター「SGシリーズ」の原型となる「SG-175」が完成する。左右対称のボディ形状が印象的なこのギターは、後に世界的なギタリスト、カルロス・サンタナの要望に応じてカスタマイズされた。ボディに仏陀のインレイ(はめ込み細工)が施されたことから「ブッダSG」という愛称で呼ばれ、当時のサンタナのトレードマークとなった。「SGシリーズ」はその後も独自の進化を続け、一九七六年にリリースされた「SG-2000」は後に〝世界のスタンダード〟と呼ばれ、その優れた品質が称賛された。

一方、エレキベースでは「SBシリーズ」や「BBシリーズ」といったオリジナルモデルを次々と市場に投入した。なかでも一九七八年に発売した「BB-2000」は、シンプルなスタイルと力強いサウンドが高く評価され、ジャズやフュージョンからロック、ポップスまで数多くのベーシストに愛用された。

こうしたモデルの開発によって、ヤマハはエレキギター・ベースの世界に独自の地位を築いていった。

「SBシリーズ」のエレキベース「SB7A CAB」(1968年)

ヤマハ初のエレクトリックギター「SG-2」(196

エレキギター・ベースで独自の地位を確立

ヤマハはアコースティックギターの開発と並行して、エレクトリックギターの開発も一九六五年頃に開始している。そして翌六六年に初のエレキギター「SG-2」「SG-3」が完成した。オリジナルデザインのトレモロユニットやネックジョイントシステム、ピックアップを採用し、前述の「FG-180」と同様にヤマハの個性と革新性を強くアピール

続く一九七五年には、高級アコースティックギター「Lシリーズ」を発表した。深みとふくよかさにあふれた低音の鳴り、パワフルな音量、卓越したバランス、そして弾きやすさを実現したギターで、国内はもちろん海外の有名ギタリストの耳目も集めた。『カントリー・ロード(故郷へかえりたい)』で有名な米国のシンガーソングライター、ジョン・デンバーは「全米各地をコンサートツアーで巡り歩くたびに探し求めていたギターが、今ここにある」と「Lシリーズ」の「L-53」を絶賛した。

革新的ギターの創造

エレキギター発祥の地であり、現

伝統と革新が融合するヤマハギター

職人によって受け継がれてきた伝統の匠の技と、それにとどまらない科学的アプローチを駆使した革新的技術。このふたつが融合することで、ヤマハギターに特別な価値がもたらされている。

革新的技術

長年使い込まれたような鳴りを生む
A.R.E.(Acoustic Resonance Enhancement)

短期間で木材を熟成させ、長年使い込まれた楽器のような鳴りを生み出す、ヤマハ独自の画期的な木材改質技術。温度・湿度・気圧を高精度にコントロールする専用の装置で木材を処理することで、新しい木材を深みのある音が出る木材へと変化させることを可能にした。1990年代後半、ヤマハがバイオリンの製造に着手したときの研究に端を発する技術で、その後アコースティックギターやエレクトリックベースなどの木製楽器にも採用され、より豊かな鳴りを求めるプレイヤーを満足させている。

A.R.E.処理を施した木材で作られたアコースティックギター FG/FS Red Label「FG5」。

アコースティックギター「FG/FS9」における音響測定プロセス。

理想的なギターを科学的に追求
アコースティック・デザイン

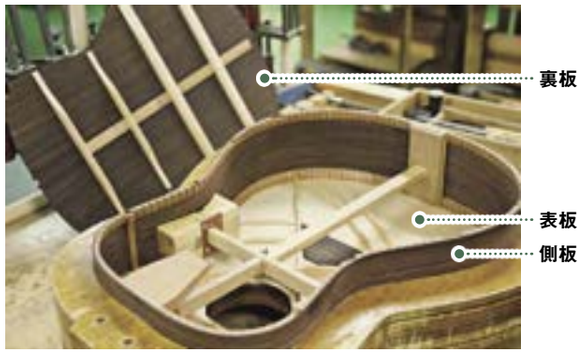
現代のテクノロジーに基づいたヤマハの設計プロセス。科学分析とシミュレーションを駆使し、ギターにとって理想的なサウンド・振動特性・重量バランス・弾き心地を追求。音響分析のプロセスでは、ヤマハのギターのみならず、名器とされる他ブランドのギターの音響特性も分析し、理想的な音響特性を可視化して再現することが可能。また「モーダル解析」というプロセスを用いて、3Dシミュレーション上でギターの振動を再現している。エレキギター「REVSTAR」「Pacifica」やアコースティックギター「FG/FS9」に採用。

モダンでクリアなサウンドを響かせる
Reflectone

プロオーディオ業界を牽引する米国ルパート・ニーヴ・デザイン社(RND)との協業により新開発されたピックアップ。ヤマハの「アコースティック・デザイン」と、RNDのトランス設計の経験を融合し、4年以上の歳月をかけて完成させた。エレキギター「Pacifica」のハイエンドモデル「Pacifica Professional」と「Pacifica Standard Plus」に搭載されており、タイトなローエンド、存在感のあるミッドレンジ、きらびやかなハイの音色が特長で、音楽のジャンルを問わず、モダンでクリアなサウンドを響かせることができる。

Reflectoneを搭載した「Pacifica Professional」。

伝統の匠の技



よりふくよかな音色を生み出す
カスタム式胴作り

1966〜67年にスペインの名工エドアルド・フェレールから学んだクラシックギターの製作技術と、従来のアコースティックギターのボディ組み立て方式を融合させた、ヤマハオリジナルのボディ組み立て方式。まず表板と側板を接着し、ボディの鳴りを阻害する応力(部材内に発生している力)をコントロールしたあとに裏板を接着する。一気に組み立てるよりも手間のかかる作業となるが、この方式により弦の振動をロスなくボディに伝達することができ、よりふくよかな音色を生み出す効果がある。

音色と演奏性を向上させ、品質も安定
ダブテイルジョイント

ボディとネックを合体させる伝統的な接合技術で、ネックの台形の凸部分を、ボディの台形の凹部分にぴったりとはめ込む。接合部の形が鳩の尻尾(英語でDovetail(ダブテイル))に似ていることが名前の由来だ。クギやネジなどは使用せず、職人がかんなや彫刻刀を使って接合部の微調整を繰り返すため、その精密かつ慎重な作業から“熟練の技”とされている。ボディとネックが正しく接合できていないと音色や演奏性が悪くなり、長期にわたる安定した品質にも悪影響を及ぼす。

かんなでネックの接合部を削って微調整。

ボディとネックの接合には、特に繊細な作業が求められる。

美しく上質な艶のある外観に仕上げる
バフ掛け

「バフ」とは「羽布」のことで、研磨剤を付けた回転するバフに塗装したギターを押し付け、磨き上げる。バフは硬さが異なるものを数種類用意。塗装の種類によって塗膜の硬さが異なるため、バフの回転数やバフを当てる力を最適に調整する熟練の技量が求められる。磨き過ぎるとコーティングが取れてしまうため、その絶妙な塩梅が難しい。ギターづくりの最終工程において、ヤマハ伝統のバフ掛けが施されたギターは美しく上質な艶を放ち、奏者の満足度を高める。

クロスオーバー対談

山本恭司×猪居亜美

ジャンルを超えるギターの魅力

今年デビュー五十周年を迎え、世界的ロックバンドVOW WOWでの活動をはじめ、クラシックの世界にも足を踏み込むスーパー・ギタリスト、山本恭司と、クラシックギターで表現するロック曲のアレンジが評判の新星、猪居亜美。ギターをテーマにしたふたりのクロスオーバーな対談をお届けする。

text by Ryuichi Yamazaki　photos by Yusuke Abe

お互いの印象とギターを始めたきっかけ

編集部　最初に、お互いの印象を教えてください。

猪居亜美（以下、猪居）　私はロックが大好きで、もちろんVOW WOWも聴いていたので、山本さんは本当にレジェンドなんです。ギタープレイのニュアンスの出し方、一音一音からにじみ出る歌心が本当にすばらしいな、と思っています。そんな憧れの方とお話させていただけることにドキドキしています。

対談で使用したのは生音にエフェクトをかけた演奏ができるヤマハのトランスアコースティック・クラシックギター。

山本恭司（以下、山本）　猪居さんといえば、まずX JAPANの『紅』を弾いているクラシックギタリストという印象があるよね。LOUDNESSの『CRAZY DOCTOR』もすばらしかった。ロックの楽曲の数々を、ギター一本でアレンジして、ひとつのバンドのように表現しているのには本当に驚いたし、まさに超絶技巧というか、自分にはないものを持っていて、うらやましい限りです。

編集部　おふたりがギターを始めたきっかけは？

山本　僕は一九七〇年に公開された映画『ウッドストック 愛と平和と音楽の三日間』ですね。それまでも洋楽が好きだったけれどポップスばかり聴いていて。でもこの映画でロックに初めて触れて、まるで雷に打たれるような衝撃を受けたんです。それでとにかく「ギターを弾きたい！」と思うようになったんですよね。初めて弾いた曲はイギリスのバンド、テン・イヤーズ・アフターの『ラヴ・ライク・ア・マン』です。

猪居　私の場合は父がクラシックギタリストで、六歳上の兄もギターを習っていました。ですから、私も物心付いたときにはギターを始めていた、という感じです。家ではクラシックしか流れていなかったし、ロックなんて全然知りませんでした。

山本　いつロックと出会ったの？

猪居　中学生のときに、友達がそれこそX JAPANの『紅』を聴かせてくれて。今でこそクラシックとつながっている感覚がありますけど、当時は真逆の音楽だなあ、と思って興味を持ちました。エレキギターも買って、高校では軽音楽部に入ってバンドを始めました。もちろん両親は大反対でしたけれど（笑）。

山本　猪居さんがエレキギターを弾いている動画を観たけれど、ピッキングも上手だよね！ もちろん指弾きも完璧だし、両方できるのは本当に強みだと思うよ。僕も通常はピックを使って、細かいニュアンスが欲しいときには指を使っていて、アコースティックギターでソロをとるときは親指で弾くんだけど、クラシックの奏法は通過していないから、その点もうらやましく思います。

ロックとクラシックの表現方法

猪居　山本さんもオーケストラとの共演をはじめ、ジャンルを超えた活動をされていますよね。例えばロックとクラシックとでアプローチを変えたりとかしているんですか？

山本　まず音作りでいうと、VOW WOWでもクラシックでも基本的にはハイゲイン（強くひずませたサウンド）でいく。お客さんには最初に「僕はこの音でやりますよ」とメタリカのリフを弾いたうえで始めるんです（笑）。そしてサウンドはそのままに、ボリュームやピッキングの強弱、弾く位置とかで表情を出していく感じかな。